

カンボジアにおける幼児教育の現状と課題 -NGO の視点から-

講師 峯村里香氏 (幼い難民を考える会(CYR) 事務局長)
(CYR: Caring for Young Refugees)

日時: 2003年08月22日(金) 13:30~17:00

場所: お茶の水女子大学 生活科学部棟 317-2 室

主催: お茶の水女子大学 子ども発達教育研究センター

1. CYR 概要と設立の経緯

(1)連絡先

東京事務所: 〒106-0046 東京都港区元麻布 3-2-20 丸統麻布ビル 2F

TEL: 03-3796-6377 FAX: 03-3796-6399

e-mail: cyr@mtb.biglobe.ne.jp

ホームページ: <http://www5a.biglobe.ne.jp/~CYR/home.html>

(2)CYR 設立の経緯

1980年に設立。峯村さんは1985年から。特定非営利法人。

設立の経緯: 難民キャンプの活動がきっかけ。難民キャンプの報道を日本で知った, 子どもの問題に関心を持つ保育士などの女性達が数名でキャンプを訪ねた。そこでは緊急救援のみが行われており, 子どもへの救援まで手が回っていなかった。帰国後、子どもたちの心と体の発達を支えていきたいと呼びかけたところ, それがマスコミなどで取り上げられて, 設立に至った。以来一貫して幼児教育を専門としている。

難民キャンプの活動は, 国連や政府の取り決めによって閉鎖されるまでの13年間。

タイでの活動: 難民キャンプの活動と前後して, タイ人のスタッフが中心となり行った。10年やって現地に引き渡し。

カンボジアの一カ国で活動している理由: 他の地域の難民キャンプで活動しようかという話もあった。しかし, 難民キャンプから還った子どもがどうなっていくのかをカンボジア国内で調査した結果, 帰還難民と一緒に現地に入って, 活動していこうと決定。その理由は, 戦争の深刻な影響を受けた国にとどまって, 難民を二度と生み出さない社会をつくるためのその環境作りをする, 子どもから平和を考える, というのが自分達の立場であると思ったため。

(3)日本にいて実際に何ができるか

保育所運営：カンボジアで開いてきた保育所を経済的な面も含めて自立させていく。
現地 NGO との協力：カンボジア国の若者などが中心となって復興を考えて立ち上がった現地 NGO と協力して、首都近郊のスラム街など厳しい子どもたちに対する活動に協力していく。

教師の再トレーニング：カンボジアの教育省などの働きかけがあって、すでに協力隊や NGO が入って活動している。公立の幼稚園の先生は養成学校を卒業して働いているが、再トレーニングがほとんど行われていない。施設があっても十分でなかったり、先生が不足していたり、テキストなどが無いというのがかなりある。教育省を通して、先生の再トレーニングに協力する。今年から開始予定。

2.ビデオ紹介

(1)ビデオ1：難民キャンプの映像（1985年くらい）

2カ所の保育センター

形態

- ・2部制。2時間半ずつ。2歳半から6歳の子ども400人近くが通う。
- ・縦割り保育。きょうだいがあまり離れないよう、家庭と近い環境であるよう。

教材

- ・カンボジアの絵本の復刻
- ・糸を巻いていくなどの簡単な遊び。資材はバンコクなどで NGO が買って持っていく。
 - ・最初は日本から見本。それを使っていきながら、その文化や伝統に合わせて遊びにふさわしいものにしていく。

保育士とその養成

- ・全員難民。スタッフが育てていく。
- ・日本人スタッフが3~4名、タイ人スタッフが約3~4名。
 - ・まず日本人スタッフが経験のあるカンボジア人の保育士に教え、その人たちが保育士に教えていく。移動の自由がなかったため、まずその中での優秀な人を選んで育てた。日本人は事前の準備のみで、その後は前に出ない。
- ・6週間のトレーニング。子どもの発達、実際の活動、衛生指導、大人の役割など。
- ・常に講義と実践のセットで教える。体で覚えていく。

衛生習慣やおやつ

- ・力を入れて教える。水も配給。清潔さを実を持って知っていくように。
- ・お菓子や果物も NGO が近くで仕入れてくる。

技術訓練プログラム

- ・建物は保育園と園庭をはさんで向かいにある。互いに自由に行き来できる。
- ・洋裁：保育園の母親が集まって、子ども服や教材入れを縫ったりすることから始まる。将来の仕事の技術となるため人気。
- ・織物：カンボジアの伝統的な織物を、貴重な技術を若い世代に伝えて行きたいという

ことで。綿の布などは洋裁の方へ持っていく。

- ・木工：机，いす，楽器などの作成。保育園の中ですぐに子ども達と使ってみて改良。

(2)ビデオ 2：カンボジアの現在の映像（郵政のボランティア貯金の広報用ビデオ）

1万5千人が暮らしていたカオイダン難民キャンプ。現在4ヶ所の保育所を運営。

5歳までに亡くなる子ども：1000人中122人。

自身が難民だった頃から活動に参加している NGO スタッフもいる。日本に2回研修に来た。

3.教材の紹介

(1)教材概要

政府，ユニセフ，ユネスコ，現地の NGO を含めて，広くカンボジアの国内に配布して，使い方など広めている。

素材：板，竹，紙など，現地で手に入り自分たちで修理できるもの。

パズル，積み木，人形，楽器，文字・数の教材，絵本，外遊具など。伝統的な風習や文化を伝えるもの、応急処置の仕方を布に書いたもの（布教材は難民キャンプで製作）。

(2)文字の教材と識字率の低さについて

文字の教材（クメール文字表）に対して，政府の配布要請が一番大きかった。

読み書きできない人が約6割。特に農村，女性に多い。女性の識字教室がカンボジア全国にある。

識字率が低い理由

- ・40・50歳代は，ポルポトの時代で学校に通えなかったため。
- ・現在は，入学はするが，ドロップアウトや留年を続けて，結局やめる場合が多い。1年生の入学率は90%くらいだが，学年が上がるときに試験があり，それが難しい。また，教師が副収入として教材費や補習料などをわずかだが子どもに払わせるため，非常に貧しいと払えなくてやめる。
- ・親が期待することは，文字や数を学ぶこと。
- ・絵本を来月完成予定。「あ」の横に「あ」のつく単語を表した絵。
- ・童謡を集めた絵本。カンボジアの人から聞いたものをおこして，歌詞に表した。カンボジアでは楽譜がないため。第2集まで作った。第3版は詩の本を発行予定。カンボジアでは詩が盛んなため。

4.保育の仕事の中で大切にしていること

(1)人材の育成

日本人が直接やるのではなく，現地の人が大切さを理解して，自分たちの国なりの文化や慣習に合ったものを自分たちで作り上げていく，そのための人材を育てていく。

保育のハンドブック：英語版とカンボジア語版を作った。政府を通じて配布。

- ・写真や絵をなるべく多く使う。文字を読めない人が多いので。
- ・後半は保健衛生や教材の作り方。
- ・今のカンボジアの状況に合わせて改訂し、それを来年作る予定。
- ・公立幼稚園の再トレーニングに使う予定。これについてアドバイスがほしい。

(2)教材や絵本の作成と普及

日本から持っていき、その次翻訳を貼って使っていくというだけでは充分でない。日本からの持ち込みは極力抑え、すべて現地で手作りして、それを普及していく。

カンボジアの4ヶ所の保育所は、モデル保育所として、政府関係者、国連機関、NGOが見学を訪れ、そこで目に付いた教材をぜひ欲しいと言うことになったら、資金を集めて製作、普及したりしている。

(3)ネットワークづくり

NGOの活動には組織の限界があって、狭い範囲での活動。

現地の人自分たちで保育の大切さに気づいていくにはどうやったらいいか。

カンボジアでは3つの方法がある。

村の中で経済面も含めた、自立した園ができるようなシステムを作る。

現地のNGOに引き渡していく。現地NGOが始めようとしていたことにCYRが援助していく。

国からの依頼の再トレーニングなど。今カンボジアで働いている現地の保育士が、トレーナーとして協力できる。

について

- ・カンボジアの公立幼稚園の場合、クラスター制度となっている。中心幼稚園の下にいくつかの幼稚園があるという体制。クラスターの幼稚園に保育士たちが月に1・2回集まって、政府の幼児教育の方針を確認しあったり、遊具や教材作りを行う。このクラスターにCYRがアドバイスを予定。CYRの研修で作った遊具や教材をその先生たちが半年ほど使った後、次の研修で事例発表してもらおう。今その打ち合わせを、CYR、教育省の人としている。研修は、CYRの保育所がある州で試験的に始め、その後、他の州でも行う計画。

他のNGO、JICA、国、国連などの経験との情報の交換を図りたい。カンボジアで幼児教育委員会というものがあって、そこに関わって報告していく。

国のきちんとした指針がない。タイやベトナムからの指針を参考にしたいと聞いている。これまで点で行っていた活動を面にしていくために、ネットワークを生かしていきたい。

5.CYRの最近の活動

(1)スラムの子どもの問題

農村は貧富の差が大きいですが、少しずつ安定してきている。今問題なのはプノンペンのスラム。子どもがごみ拾いをして生計を立てたり、物乞いをし、路上生活をしている。

(2)エイズの問題

東南アジアでは、カンボジアがもっともエイズ感染者が増えている。

コファという現地の NGO のボランティア職員が、寺子屋を運営している。120 人くらいの子どものうちの 6 割が就学前の子ども。そこから、子どもたちが安心して過ごせるような保育所がほしいとの依頼。この地域はエイズ感染者が多い。

今後調査に入り、寺子屋を改良したり、近くに保育所を立てることを考えている。

コファというのはエイズの予防教育などを行っている団体。その中で、今は子どもの問題も取り上げて寺小屋を始めた。

6.質疑応答 1

(1)CYR の組織について

Q.組織の大枠を教えてください(酒井)

A.会員数、活動、収支について(峯村)

会員数：事務所は東京、全国に 600 名。寄付を続けているのが 600 名。マスコミ関係や教育関係など含めて、全部で約 1500 名に支えられている。

カンボジアでの支援以外の活動

・開発教育：力を入れている。ここ 1 年くらい、総合教育が始まってから、学校関係からの問い合わせが急増。

写真雑誌（子ども向けに、戦争と平和、カンボジアの様子を伝えるもの）を作成中。

講演（学校関係）

ボランティア体験（修学旅行で NGO 事務所に来る。半日かけて、ビデオを見せたり、チャリティー品整理などの体験）

海外活動の広報など

収支

・収入：5000～6000 万円。

会費：400～500 万円

寄付：1500～1700 万円。企業、労働組合、個人、寺、教会より。

政府の補助金：国際ボランティア貯金、NGO 事業補助金、草の根無償

民間の財団：1200～1600 万円。生活クラブ生協、青年会議所、宗教関係

事業収入：チャリティーバザー、カレンダー、スタディツアー、織物販売

・支出

人件費：人件費は安い（日本人職員 5 名）支出項目では最も額が多い。長期的な人材を育てるために。日本から常駐として送っている人、栄養や建築や織物の専門家派遣など。

事業費：経済的に自立させていく。これが一番難しい。国連や NGO が引き上げると 1 ヶ月で事業が中止されたりする。

・村の保育所（簡易なもの）なら約 50 万～70 万、公立は約 200 万くらいで建つ。年間運営費は約 80 万。内訳は、施設修繕費、教材費、人件費、給食費など。

これらを削減していく。方法は、遊具などはお金がかからないように修理し、建物はある程度壊れていてもなじんでいるならそのまま。

今は約 50 万くらいに減らした。最終的には約 30 万円に減らしていく予定。

- ・その約 30 万円を集めるために、保育料を年々上げていく、小規模な貸付を行う、日本から支援者を募るなどの方法をとる。

(2) 幼児教育と初等教育

Q. 幼児教育は何歳までか？またその後の初等教育はどう整備されているのか？(酒井)

A. 幼児教育の対象年齢としては 4~6 歳。小学校は日本と同じく 6 年生まで。(峯村)

約 8% しか幼児教育を受けていない。CYR では貧しい子どもを優先で入れている。

幼児教育は、公立が約 1800 ある。しかし建物だけあつたりするので、数字の中身はあやしい。

幼稚園と保育所は別。公的な保育園は 1 つしかないと聞いている。幼稚園は午前中。給食なし。

小学校は 2 部制、3 部制だつたりするので、小学生が幼稚園に来て、兄弟の世話をしたり、絵本を読んだりする。学童保育のような機能も一部果たしている。

Q. 公立幼稚園の 1000 以上という数は多いと思うが、何年くらい前から？(無藤)

A. 1989 年に入り始めたときにはすでにいくつかあつた。4~5 年前は 800 くらい。(峯村)

プノンペンに多い。

建物があつても、中には廃材があつて子どもは外で遊んでいる、あるいは先生がいないという場合がある。先生は給料が低く、働きに行ってしまうため。

Q. 州ごとに教育局などがあるのか(無藤)

A. 教育局幼稚園課がある。そのもとにクラスター校がある。(峯村)

小学校校長先生と園長先生を兼ねていたりする。

Q. 小学校には幼稚園がついているもの、というのが入っているのか？(無藤)

A. 入り始めている。政府の方針としても、小学校でのドロップアウトが多いので就学前教育に力を入れていきたい、というのがこの 1~2 年。

(3) 体罰、文化

Q. カルカタでは体罰が多かつた。カンボジアでもあるか？(田中)

A. 近いものがある。公立の幼稚園で、先生が木の棒を持って、子どもを叩きながら教えるのをいくつか見たが、それ以外にはあまり見なかつた。ただ子どもたちが自由に遊ぶという環境づくりがまだまだ。貧困からくる家庭内暴力というものもある。

Q. 子ども観が関わってくるのでは。(坪川)

途上国は一般的に体罰が多い。悪いことをしたら叩く。子どもを愛して自発性を大切に、

というのは現地だけでは中々生まれてこない。遊びが大切である，というのは外国人の役割なのでは。

手を洗って，という日本式の衛生を持ち込むことも必要。たった4～5年で3分の1の国民が殺される，目の前で父母が殺される，という経験をしている。ビデオの水浴び場面の子ども楽しそうな様子を見ると，衛生を超えた部分まで関わっているのだと感じた。生きるという意味での衛生。

A. カンボジアの人々が望むことに応えることと，よいと思うものを持ち込むことの両方の側面を大事にしていきたい。また心のケアにも重きを置いていく。(峯村)

文字や計算を知識として覚えてほしいという親のニーズが大きくある。

日本のものが根づかないと思ったら引き上げるし，どうしてもお互い理解したいというものは時間をかけていく。

カンボジアでは水の問題が非常に深刻で，乾季では水不足だし，下痢で簡単に命を落としていく。

ビデオの保育所はモデルで，第2段階にいつているため，衛生，水浴びが気持ちいい，というところまで行っている。しかし，最初は生きるのに精一杯の子ども達の保育からスタート。

拠点システムでネットワークを作っていく上では，情報交換をして，広い視野での幼児教育をしていく。しかし一方で，緊急的な子どもたちがいる，地域がある，ということは覚えておきたい。

(4)保育者の養成に関して

Q.保育者の養成ということで，他の国の養成大学とどう協力できるのか。どういう意味があるのか？(前田)

A.卒業後のフォローアップ。(峯村)

2年半カンボジアにいたときに一緒に働いた野村さんという方が，今はJICAのシニア・ボランティアとして，国立の幼稚園教員養成学校で働いている。

先生の希望としてあがってきたのが，養成学校を卒業して幼稚園で働き出した後の，フォローアップをお願いしたいということだと聞いた。卒業後にトレーニングを受ける機会がない。SVA，養成学校，政府，と意見交換していきたい。

難しいのは，国のシステムができていないこと。

- ・教育省が，幼児教育の指針づくりの委員会を作ったが，その後半年たっても何も開かれない。日本側の要請に対してあわてて作ったものだろう。
- ・幼児教育委員会：NGOを中心として，集まっている。月1回ミーティング。国際も現地も交えて勉強会。そこに政府や国連の関係者がくる。そこで発表したりして，関わっていく。

7.質問項目に対する回答(未回答のもの)

(1)準備

非常に大事。日本から専門家に参加してもらい、調査に時間をかける。

調査の観点は、幼児教育において国のシステムとして何が行われているか、感じている問題は何か、他の援助はどのようなものか。

勝手に始めるのではなく、政府や国連などとの話し合いが必要。

- ・州レベルにも降りていって、幼稚園のことや村の組織との話し合いで必要な契約を交わす。そこでどこまで責任をもつのかをはっきりさせる。
- ・日本人がお金をもってくるので過度な期待がある。そのため、必ず契約には政府の人にも立ち会ってもらって、3者間での契約。1年ごとの3年契約など。

(2)宗教

小乗仏教。生活の中に入り込んでいる。お寺の中に保育園があったりする。

(3)現地 NGO との協力

7~8年前までの NGO は、政府のバックアップで、実際には政治的な活動をしているものが多かった。

最近では、20代~30代前半の若者による、新興 NGO が増えてきている。それと関わって活動をしている。シパーが移動図書で絵本読み聞かせをしており、保育所に毎月来てもらっている。

現地 NGO とは、幼児教育委員会などで知り合う。話し合いの中で要請があり、調査をして、活動開始。

(4)評価について（「子どもたちの健康栄養調査」「保育所卒園児のその後の生活調査」）

日本から医師と栄養の専門家を派遣。

周辺地域の子どもをコントロール群として比較。

結果

- ・栄養面：コントロール群との差がなかった。
給食費を削り始めている。ご飯にスープをかけたものだけでもよく、この食事ができれば現状に合っているのではないかと考えた。栄養改善は今後、都市のスラム街で行うことを検討する。
- ・知能検査：明らかに違いあり。色の認識、名前、数、単語など。今英語に訳して政府や NGO や国連に配布して説明している。
- ・卒園後調査：出た子どもたちが今どこで何をしているのか。小学校に入ったのか、やめたのか、どのような仕事をしているのか。ほぼ全員が、ずっと通いつけている。幼児教育がきっかけとなったのでは。やめている場合は、なぜやめたのかというのを1軒ずつまわってインタビューしている。
- ・保育所に通ってどう思ったか。よかったところ、まずかったところ：親としては、保育所があってよかった、という意見が出てきた。

卒園児調査は専門家を送らずに、現地保育者に、なぜこれをやるのかというトレーニング

グを行った。親や小学校の先生方の意見を聞いて。報告書はまだドラフトの段階。

- ・試験的なので、今後継続して行っていく予定。調査の仕方は、保育士や村の人に残していく。この辺は、方法などアドバイスがほしい。

8. 質疑応答 2

(1) 海外視察に関して

Q. 現地の大学との関わりは？ (藤江)

A. これまでコンタクトはほとんどなかった。教育省や女性省など国の行政の機関と、州レベルでの機関との話し合い、にとどまっている。今後機会が生まれるかどうかは分からない。(峯村)

Q. 単位としては、州がメインなのか、それとも国か？ (藤江)

A. 両方。地域からここに保育所がほしい、というのがあったら、そこから郡の担当と州の担当が話し合っ、国に行っ、また郡や州、そして村に戻ってくる。(峯村)

Q. 視察に行くときに、どういうルートがあるのか？ (藤江)

A. 事務所があるので、全面的に受け入れる。(峯村)

現場で働いている日本人職員 2 名。1 名は幼児教育の専門家。1 人は設立当時から。

現地にある日本の旅行会社とも相談。

希望を言ってもらえれば、プランを提案し、話し合う。

保育所を訪問する他に、地雷関係施設、孤児院、政府関係、などの手配ができる。

村の中を歩いて家庭での様子も見てほしい。

一般を対象としたスタディツアーというものもある。

1 週間で 20 万円強くらい。バンコク乗り継ぎ。

Q. NGO があまり入っていないようなところについて、事前にニーズや現状をpushするときに、どうしたらいいか？ (藤江)

A. 行政、国連の機関を通じて。(峯村)

国連の中から、欧米の NGO を紹介してもらう。

NGO のネットワークがある。通訳を介して、村の人の声を聞く。

Q. 大学同士でやり取りしていくと言うのは可能か？ (藤江)

A. プノンペン大学は可能性があると思われる。すでに研修生や留学生がいるところだと、話が早いだろう。(峯村)

理想を言うと、現地のカウンターパート、NGO、協力隊、JICA、大学という順だと思う。

大学の人が、本当に現状を知っているのかは疑わしい。地元で動き回っている人がいいのでは。(田中)

(2)絵本に関して

Q.幼児教育に関わる人は、絵本を大事にしている。しかし JICA の視点から言うと、絵本は個人のものとなってしまって、教材としては認められない。そのため JICA の協力が得られない。識字といったときに、「あいうえお」だけではなく、絵本と併用するというのがあるのではないかと。(坪川)

JICA は事務所の判断が大きく入ってくる。絵本はコストがかかる割には成果が見えにくい、というので教材としては見えにくい、ということになったのではないかと。(田中)

A.JICA シニアボランティアの野村さんがブノンペンの幼稚園で働いていて、彼女の要請で CYR の歌絵本を届ける予定。(峯村)

(3)拠点システムは何ができるのか

Q.NGO は経験が豊富で、ある程度ノウハウがあって、今後の方針もたっている。その中で、こちらは何ができるのか。国内の実践の情報収集や、これまでのやり方をまとめたり、ということはあるのだが、それがどんな意味があるのか、どうリンクするのか。(酒井)

A.色々な国で過去どのようなことが行われてきたのかという情報の集約がまだどこにもないため、データベースとしてあるというのはとても意味があると思われる。(峯村)
幼児教育が専門という NGO は非常に少ない。たいていは様々な活動の中の 1 つとしてやっている。

この国でこういう活動をしたいが、どういう団体があるか紹介して欲しい、などの問い合わせがある。国際協力 NGO センターというのがあるが、幼児教育だけ取り出すことは難しい。

また、CYR からの要望としては、今後遊具の写真と使い方の説明や、トレーニング、保育ハンドブックといった、普遍的なもの、残るものを作っていきたいのだが、それについて専門的なアドバイスがほしい。

日本でも、大学の先生とのつながりと言うのがこれまで少なかった。

日本での開発教育において、総合学習の教材作りを一緒に考えていきたい。

日本の国立大学にはたくさんの留学生がいる。しかし、幼児教育を勉強して戻っても、それをどうやって生かしていけるのかという意識はなかった。受け入れる側の大学も、心理学などの単位としての提供はするが、実習などのトレーニングがなく、本当に生かすための教育はしていない。それを行政レベルの人達がちゃんと受けられれば、意識改革につながるのでは。(坪川)

(4)幼児教育支援を行っている NGO について

Q.CYR の他に、どんなところがあるのか。具体的には?(清水)

A.JNNE に属している団体の中にある。特にシャンティ国際ボランティア会は、タイとカンボジアでの活動。(峯村)

JNNE に属していない団体もある。個人で活動している場合もあるが、ネットワーク

に属している団体なら話を聞きやすいのでは。

とりあえず，ネットワークに属している団体と，青年海外協力隊からヒアリングしていく。(無藤)

(5)開発教育について

Q.開発教育，国内向けの情報発信において，大学が貢献できることがあるのではないかと
いうことだが，総合学習に関しては，すぐに使える小学生や中学生のカリキュラムを提
供するということはできるだろう。(酒井)

A.総合学習の中の援助や国際協力，特に自分達と同じ「子ども」という所で関心が高い。
教科書にNGOが出てくる。ではNGOというのは何か，を調べるために，まずインター
ネットで「子ども」「難民」というキーワードで調べて，関わっていそうなところとコン
タクトをとることが多いようだ。この時に，幼児教育支援に関する情報が集約したもの
があれば，日本の教育現場で、将来の国際的な人材育成という観点からも、活用でき
ると考えられる。(峯村)

<いただいた資料>

1.季刊誌

- ・CYR 季刊誌(2003年6月)&リーフレット

2.報告書等

- ・CYR「カンボジア保育所通園児と非通園児の栄養・健康調査」
- ・CYR「カンボジア4保育所の卒園児を対象とする生活実態調査報告書(ドラフト)」
- ・CYR 年次報告書 2003/08/27

3.教材等

- ・カンボジア語の保育書
- ・カンボジア歌絵本第1集(歌詞の訳あり)
- ・カンボジア語の物語絵本
- ・文字盤，カードサンプル

4.ハンドブック等

- ・A Handbook for Parents on Child care. The developing refugee children: An example from Asia
- ・National Curriculum Standards for Kindergartens Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, 2001

5.JNNE 報告書

- ・教育協力 NGO ネットワーク(JNNE) 研究会報告書 2002